



Title	縄文後期末から続縄文前半期における墓の社会的機能とその変化 : 墓の上部構造を中心とした分析
Author(s)	青野, 友哉
Citation	北海道考古学, 46, 105-119
Issue Date	2010-03-31
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/48314">https://hdl.handle.net/2115/48314</a>
Type	journal article
File Information	aono_hokkaido_46.pdf



## 【論文】

## 縄文後期末から続縄文前半期における墓の社会的機能とその変化

—墓の上部構造を中心とした分析—

青野友哉\*

キーワード：墓 墓の上部構造 モニュメント効果 南川型葬法 墓の社会的機能

## はじめに

北海道の縄文後期末から続縄文期にかけての墓制研究は、周堤墓の調査を契機とした一連の研究（瀬川 1980・1983、木村英 1981、乾 1981、大谷 1983、林 1983、春成 1983、木村尚 1984、矢吹 1984）、特に林謙作が行った墓の諸属性の精緻な分析による埋葬原理の把握と、それに基づいた社会関係の復元の研究を基礎として進められてきた。この「墓を用いた」社会の復元という研究動向は近年も大きく変わらない（藤原 1999・2007、青野 1999a・1999b、瀬川 2007）。しかし、一方で墓自体の研究としてその機能を明らかにするという視点は希薄といえる。

小杉康は、墓が「死体の物理的処理および隔離」と、「死者の社会的処理」だけではなく、文化制度として社会的に機能することを述べている（小杉 1995）。これと大きく関わるものとして、墓の外部施設的な要素が「モニュメントとしての作用（モニュメント効果）」（小杉 1995）を有する点が挙げられる。モニュメント効果とは、不朽的な材料による墓標等の外部施設の設置により、永続的に視認されるようになり、その結果（効果）として集団が結束する際の物理的かつ観念的な拠り所になることである。そこに、墓に内在されている社会的機能の一端が想定されているものと思われる。

当該期の墓制研究において墓の社会的機能を論じた例としては、瀬川拓郎が「区画墓の解体から多副葬墓の成立」にいたる社会動態を叙述する際に、区画墓と多副葬墓が持つ社会的機能について言及した論文が挙げられる（瀬川 1983）。具体的には、「土籬」（周堤墓）の区画は、「集団の領域占取」の正当性を明示するという対外的機能と、「個別世帯の相対的自立性、あるいは財の流通・占有をめぐる成員間の格差」という集団内<sup>(1)</sup>の矛盾を押さえ込む、対内的な規制の機能があったとしている（瀬川 1983）。また、多副葬の機能については、まず、玉類などの稀少財を首長が持つことは集団全体の威信を高める働きがあること、そして他集団との玉類の交換は社会的な紐帯を強化する働きがあることを前提として、玉類の稀少性を維持するための再調整にあったという。

瀬川は「区画」の消滅と、多副葬の出現に主眼を置き考察したが、この時期における墓の上部構造の変化については触れられていない。本稿では上記の点を踏まえ、墓自体の機能の時期的変遷を明らかにする前段階として、墓の上部構造が持つ社会的機能を把握することに努めたい。

分析対象は北海道の道央から道南西部の縄文後期末から続縄文前半期の墓である。縄文後期

\* 伊達市噴火湾文化研究所

末から晩期の例は恵庭市カリンバ遺跡、晩期の例は余市町大川遺跡と木古内町札苅遺跡、続縄文前半期の例は大川遺跡と白老町アヨロ遺跡、江別市元江別1遺跡である。これらの遺跡検出の墓坑は土器型式毎の時期の把握が可能であるため、上部構造の形態変化の時期が捉えられ、社会的機能の考察に適していると考えた。

### 1. 墓の上部構造—墓標と墓標的機能の整理—

山田康弘は墓を上部構造と下部構造に分けて捉えている(山田 2008:43)。上部構造とは墓坑上の配石や盛土など、地表面に表れた部分を指しており、下部構造は地下にある墓坑を指している。また、両者を合わせて埋葬施設と定義している(山田 2008)。本稿では基本的に山田の定義に従いこれらの用語を用いるが、墓の上部構造については、配石による墓標や追葬を目的に設置された上屋、墓前儀礼用の祭壇などを想定し、これらが設置された時点において旧地表面よりも上に表れていた部分という意味で用いている。つまり、発掘調査時に墓坑の覆土中から検出されたものであっても、土層断面の観察により、遺体埋葬後の墓坑内の陥没などが原因で、本来の地表面上から覆土中に移動したと判断される場合は、墓の上部構造に含めることとした。

次に、墓の上部構造とそれが持つモニュメント効果、さらには社会的機能について考える際に、墓標と墓標的機能を整理する必要がある。墓標は、墓の存在を積極的に表す意図をもって作られ、それが持つ作用を予期して作られたといえる。例えば、墓の重複を避けるためや、世帯の埋葬区を明示するため、再葬を意図した一次葬墓の目印とするため、さらには死者の記憶を顕在化するためなどである。

一方、墓坑の屋根として作られた上屋や墓前儀礼用に設置された祭壇などは、本来の目的とともに墓標としての機能も併せ持つといえる。また、祭壇はなくても直接墓の上で副葬品やベンガラなどを用いた儀礼を行うことで、その痕跡が墓を表示している場合も考えられる。さらに、墓坑を埋め戻す際に遺体の堆積分余った土砂を墓坑上に盛った場合も墓標とする意思はなくても、結果的に墓の表示となる。

つまり、何らかの上部構造を持つものは意図的ではなくても墓を表示しており、墓標的機能を有しているといえる。ただし、発掘調査において検出しやすいものは恒久的な材料を用い、墓標として意図的に作られたものである。そのため、有機質の墓標など検討できない要素があることも念頭に置く必要がある。

本稿では可能な限りの墓標的機能を有する墓を分析対象とするため、配石や集石のような礫を用いたもの以外にも、ベンガラや砂利の検出、玉類や土器の出土なども墓の上部構造の痕跡として含めることとした。なお、墓の上部構造としての認定に当たっては風雨による土砂の流出や遺体の腐食による墓坑の陥没などの影響を考慮し、出土状況の検討をもとに判断している。

以下では、縄文後期末～晩期初頭、縄文晩期、続縄文前半期の各時期に分けて、墓の上部構造の実例を挙げる。それにより、恒久的に墓標的機能を有する墓及び墓坑埋め戻し後の儀礼行為は、縄文晩期に内容的に変化が起り、続縄文前半期になって減少することを示す。

## 2. 縄文後期末～晩期初頭の墓の上部構造—恵庭市カリンバ遺跡—

恵庭市カリンバ遺跡は旧カリンバ川の右岸、標高25～26.5mの低位段丘面に位置している。国史跡に指定される契機となった道路工事に伴う緊急発掘調査では、縄文早期から近世アイヌ文化期までの遺構が検出されたが、特に縄文時代の土坑墓は308基あり、漆製品や玉類を副葬する後期末～晩期初頭の墓が調査されている（上屋他 2003）。調査者である上屋真一は、特徴的な8基の墓の上部構造により、土坑墓を4つに分類している。①「1点～数点の大型円礫を伴う土坑墓」（82・118・123・126号墓）、②「大型円礫を周辺に配する土坑墓」（113号墓）、③「大型～小型の礫が積み重なって出土した土坑墓」（116号墓）、④「小砂利・ロームマウンドのある土坑墓」（30・82号墓）である。

また、調査者は、埋め戻し後の墓の上に土器（御殿山式）を置き、わずかに土をかけた例を「土器を伴う土坑墓」（30・80・82・118・123・126号墓）として6基挙げている。これらは先の上部構造を持つ墓とほぼ重複している。このことは、覆土上部から出土したこれらの土器は墓の上部構造の構築時に一連の流れで埋められており、埋め戻しの最終段階における儀礼行為に用いられたことを示すと思われる。つまり、これらの土器は上部構造を構成する要素として扱われるべきであり、さらに礫と土器が供伴する点を注視すべきと考える。そこで、以下のように再分類して記述することとする。なお、礫や土器を伴う墓坑はこのほかにも存在するが、報告者が抽出した土坑墓を例に記載している。

### 礫のみを集積する例 (113・116号墓)

113号墓は大型円礫を墓坑周辺に配している（図1左）。この例は礫が散乱し、現位置を保っていないと思われるが、墓坑上の高い位置に礫が数点残っていることと、墓坑の東側に列として礫が並んでいる状態から判断すると、本来は墓坑上のマウンド裾に礫を配し、マウンド上にも礫を置いていたと考えられる。

116号墓は大小の礫を墓坑上に積み重ねた墓である（図1右）。これも墓坑上の中心付近に礫が置かれてい

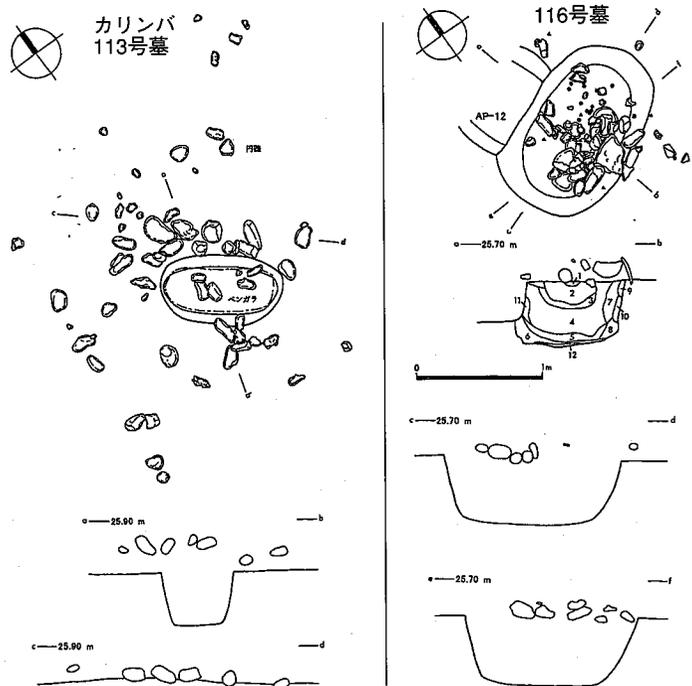


図1 墓坑上部に礫を集積する墓（カリンバ遺跡113号墓〔左〕、116号墓〔右〕）

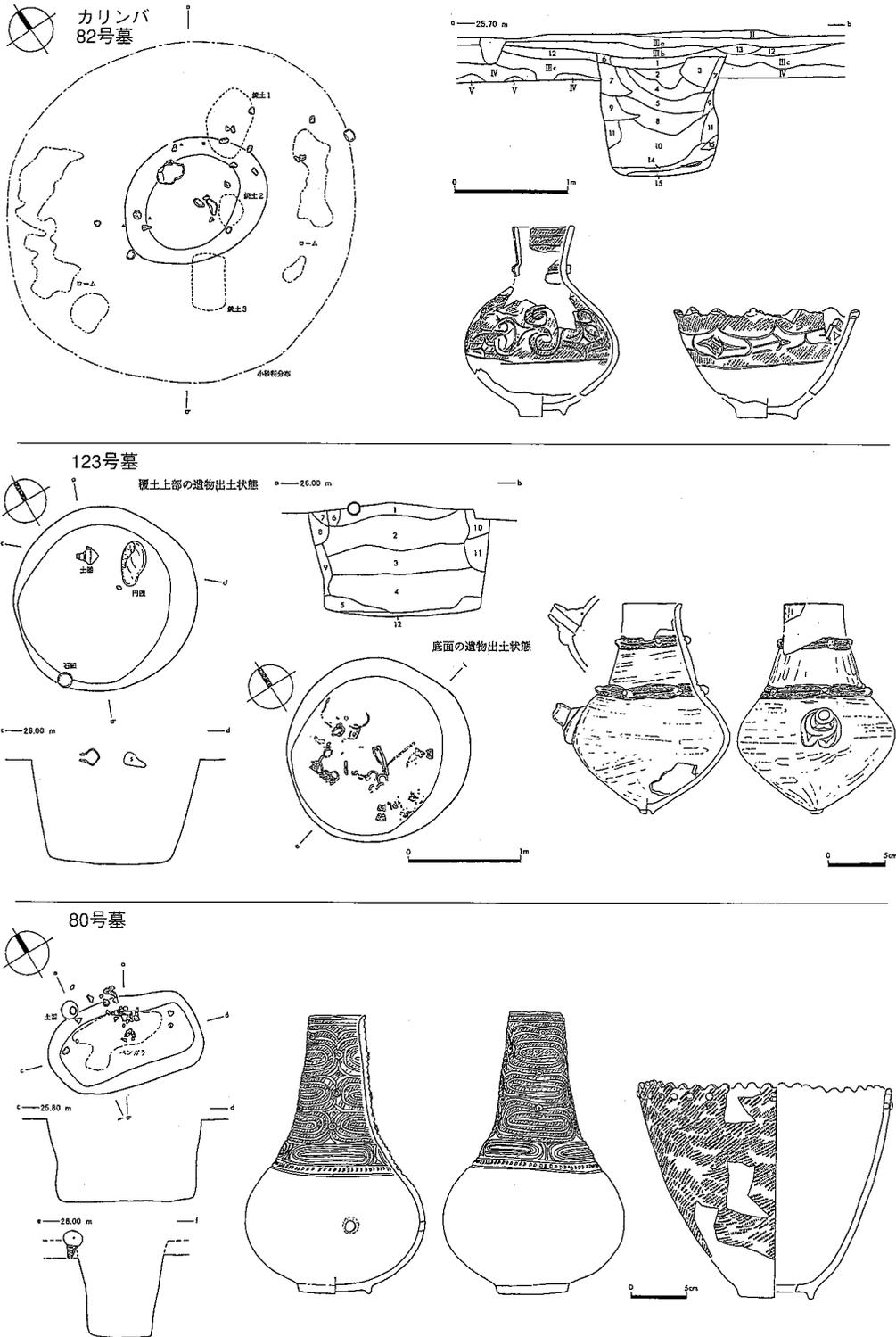


図2 墓坑上部に礫・土器が伴う墓 (カリンバ遺跡82号墓〔上〕、123号墓〔中〕) 及び土器のみが伴う墓 (80号墓〔下〕)

る。なお、図示していないが、小型の礫が墓坑中央に集積する例として、134号墓も含められるかもしれない。

#### 礫と土器が伴う例（82・118・123・126号墓）

82号墓は墓坑上の直径3mの範囲に、小砂利とロームが存在している（図2上）。これらは意図的に散布したか、マウンド状に土を盛り上げたものが崩れたと考えられる。覆土上部から拳大の円礫18点が出土している。また、覆土上部と遺構外出土の土器が接合した壺形土器1点と浅鉢形土器3点が伴ったと考えられる。

次に、118号墓、123号墓、126号墓は大型円礫数点と土器を墓坑上に置いた墓である。このうち、118号墓、123号墓は4～5体の合葬墓と考えられている。

118号墓は図示していないが、墓坑覆土上部より、拳大から直径25cmほどの礫と注口土器、浅鉢形土器、木製容器の可能性のある漆製品が出土している。遺物は、他の例と比べると掘り込み面からやや深い位置で出土しており、埋め戻し時に埋設したか、遺体の腐食により覆土全体が沈み込んだものと考えられる。

123号墓は覆土上部から大型円礫と石皿、注口土器1点が出土している（図2中）。

126号墓は覆土上部から大型の溶結凝灰岩礫1点が出土し、その下から土器破片が少量出土している。墓に伴うと考えられる大型の注口土器は、覆土から出土した破片1点と周辺の包含層からの出土土器が接合したものである。

#### 土器のみの例（30・80号墓）

30号墓は墓坑上面で246cm×206cmと大型の土坑墓であり、合葬墓と考えられている。墓坑上部と周辺には小砂利とローム、ベンガラが広範囲に分布しており、漆塗り櫛1点と石棒1点、玉類多数が出土している。墓坑覆土からは注口土器などが出土している。

80号墓は覆土上部から壺形土器と鉢形土器が出土している（図2下）。完形である壺形土器は墓坑の縁に倒立の状態でも出土した。鉢形土器は墓坑中央付近で破片の状態でも出土している。

これまでみてきたように、墓坑上部から出土する土器は、壺形土器あるいは注口土器が含まれ、これに鉢形土器が伴うことが多い。そして、80号墓の例が示すように、壺形土器と注口土器は本来、倒立した状態で墓坑上に突き立てられた、あるいは埋められていたと考えられる。これは82号墓と126号墓の土器について、覆土上部出土破片と周辺の包含層出土破片とが接合し、ほぼ完形の状態に復元できていることから言えることである。

さて、上記のような分類で考えてみると、当該期のカリンバ遺跡の墓坑のうち、上部構造を持つ墓坑には礫と土器の組み合わせが多くあり、同時に、礫と土器を用いた埋め戻しの最終段階における儀礼行為が存在することがわかる。礫と土器のどちらか一方のみである例は、本来は両者が揃っていたが、「遺跡化」（小杉・鶴田 1989）の過程で消失した場合と、儀礼の簡略化によるものである可能性がともに想定される。なお、墓坑上部に小砂利やローム、ベンガラが検出された墓坑についても儀礼行為の結果と捉えられる。

次に、これらの行為の具体的な復元について、現段階で可能な範囲内で考察してみたい。

カリンバ遺跡の1999年度調査区における縄文後期末から晩期初頭の墓坑は36基検出されてい

る(上屋 2003)。このうち、墓坑の重複例は、120号墓と112号墓が重複する1例のみである。このことから、大半の墓には墓標的機能を持った何らかの上部構造があり、それを避けて墓を造っていた可能性がある。しかし、それらの大半は恒久的なものではなく、低いマウンド状の痕跡であった可能性が高い。

先に見た礫や小砂利を用いた上部構造を持つ墓は、80号墓を除き、墓坑底部から漆塗櫛が出土している。さらにそのうちの3基が合葬墓と考えられている(30号墓・118号墓・123号墓)。つまり、漆製品という稀少財の出土と、礫と土器による上部構造には関連性があるといえる。

また、墓坑の埋め戻しの最終段階での葬送儀礼は使用された土器が表象する意味に関連し、その埋納が行われていると思われる。土器の器種は壺形土器か注口土器の何れかが含まれており、倒立した出土状態からも、あえてこの器種が選ばれて使われていることがうかがえる。

なお、土器の造形に関しては、カリンバ遺跡と同様の墓が検出された新ひだか町御殿山遺跡出土の注口土器についての藤本英夫の指摘がある(河野・藤本 1961:23、藤本 1971:44)。藤本は「注口基部には二個或は一個の膨みがりつけられており、恰も男性々器を思わせる」(河野・藤本 1961)と、注口土器が男性器を表現したものと捉えている。筆者もカリンバ遺跡123号墓出土土器の注口部分は男性器の表現と捉えているが、同時に尖底部分は女性の乳房の表現と捉え、性の融合形態、つまりは「生命」を表象する存在と考えている(図2中)。また、注口土器と鉢形土器、壺形土器と鉢形土器という対となる器種が出土する場合があります、「生命を注ぐ(出す)もの」と「注がれる(受ける)もの」という2つの存在をもって、生まれることと失うことの表裏一体性を表していたとも考えられる。

そして、注口土器と壺形土器が墓坑上で倒立して埋められていることは、それが表象する「生命」に関連した行為であることは間違いないと思われる。ただし、「逆さ」であることの意味するものが、被葬者の「死の表示」(生者への通知と死者への宣告)であるのか、「再生祈願」であるのかは意見の分かれるところであろう<sup>(2)</sup>。

なお、瀬川は恵庭市柏木B遺跡でみられる小型の壺や注口土器を「祖先崇拜祭祀にともなう共食儀礼の存在を示唆する」(瀬川 1983)としており、実際にこれらの土器の使用がなされたことも考えられる。

いずれにしても、埋め戻しの最終段階で土器を埋める儀礼行為があり、それと同時に墓坑上への配石、ないしは小砂利やベンガラ散布が行われ、墓の表示がなされることになる。これらの葬送儀礼が複数の集団構成員の前で行われたとすると、その後の一定期間は墓の上部構造と被葬者が記憶として結びついた状態を保つはずである。

なお、恒久的である配石を伴う墓は、墓坑底部に稀少財を持つ数少ない墓や合葬墓である。漆製品や玉類を持つ墓坑は全体の約12%と少ないことから、被葬者が集団内で特定の役割を担う存在であることは推測できる。つまり、これらに対する墓の上部構造は墓標的機能を意図して作られており、特別な被葬者の存在とその象徴性とを生者が意識する機会を保つという機能を有したと思われる。

### 3. 縄文晩期の墓における変化—余市町大川遺跡・木古内町札苺遺跡—

縄文晩期の墓の上部構造は墓坑上部を礫で覆い、それに土器が伴うものが多いことから、縄文後期末から晩期初頭の構造を引き継いでいるといえる。ただし、墓坑底部にも礫が存在する例もあり、縄文後期末との相違点として挙げられる。

晩期前葉の例として余市町大川遺跡GP-904、GP-920、GP-919が挙げられる。

GP-904は図示していないが、覆土上面に大型の礫と土器が存在する墓である。この墓坑の土層断面をみると、礫と土器を含む層が、墓坑中央に窪んだ状況となっている。同時に、遺体層の左右が垂直方向に直線的な土層堆積となっていることから、埋葬時には木棺ないしは木槨が存在し、埋葬後に墓坑中央部が陥没したと考えられる（乾編 2000b:94）。そのため、礫と

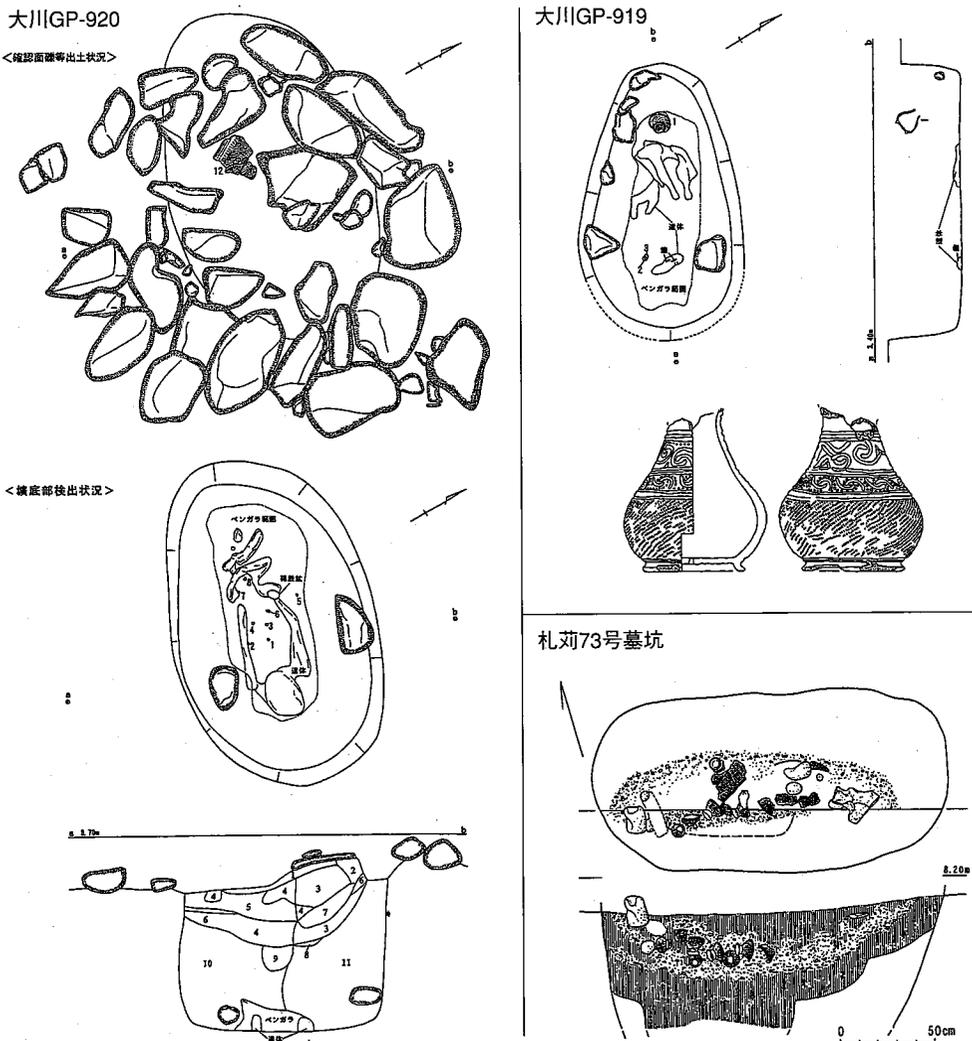


図3 縄文晩期の墓（大川遺跡GP-920〔左〕、GP-919〔右上〕、札苺遺跡73号墓坑〔右下〕）

土器は、本来、盛り土の上に置かれていたと考えられる。土器は深鉢形土器と台付鉢である。

GP-920 (図3左) は礫が墓坑上部全体を覆っており、隙間から土器 (舟形土器と深鉢形土器) が出土している点は後期末と類似している。相違点は、墓坑底部付近に大型の礫2点が存在し、遺体層を両脇から挟む位置にあることである。墓坑底部からはヒスイ製玉類が10点出土している。

GP-919 (図3右上) は覆土上部から壺形土器が口縁部を斜め下方にした状態で出土しており、本来はカリンバ遺跡例と同様に倒立状態で埋納されていたことをうかがわせる。しかし、墓坑上部の配石はなく、その代わり墓坑底部壁面から6点の礫が確認されている。遺体付近からは蛇紋岩製の玉類2点が出土し、ベンガラ散布も認められた。

晩期中葉の例として札苅遺跡73号墓坑を挙げる (図3右下)。この墓坑は、覆土上部から中位にかけて礫と砂利が存在し、その下から小型の壺5点、台付鉢5点、中型の壺1点、中・大型の鉢3点と有孔円盤が出土している (野村 1984)。土器の点数は他の例と比較すると格段に多いといえる。詳細な土層断面図がないため検討できないが、これらの上部構造も本来の位置より落ち込んでいる可能性がある。

晩期後葉の例として大川遺跡GP-335を挙げる (乾編 2000a:121)。この墓坑の上部中央には大型の礫が配され、礫の下からは動物の頭部を模した装飾を持つ、完形の突起付き容器が出土している。覆土中位には礫が存在するが、墓坑底部にはない。墓坑上部において特殊な土器が礫の下に埋設されている状況は、縄文後期末からの形態と変わらないといえる。

なお、大川遺跡の縄文晩期における墓坑上部に礫を持つ墓は45基ある (表1)。ただし、これは大川遺跡1989~1994年度調査区のうち、報告書 (乾編 2000a・2000b・2001) に掲載されている75基を対象に集計したものである。当遺跡では縄文晩期の墓坑が636基検出されており、調査報告書の作成に当たっては取捨選択され、すべての墓坑が記載されているわけではない。そのため、副葬品や墓坑上部に配石がない墓は特に掲載されていない可能性もあり、実際の割合は示せない。しかし、この表からは、墓の上部構造と稀少財を持つ墓との相関関係や、縄文晩期における礫の出土位置の変化を読み取ることができる。

大川遺跡の場合、恒久的な上部構造といえる礫を用いた墓は45基あり、そのうち玉やサメ歯、漆塗り腕輪などを伴う墓は18基 (40%) にとどまっている。カリンバ遺跡の縄文後期末の場合は、礫による上部構造を持つ墓12基 (82・85・113・116・117・118・123・126・134号墓、105・114・115号土坑) のうち、漆塗り櫛や玉類を伴う墓は9基 (75%) である。このことは、縄文晩期になると稀少財を伴わないが礫による上部構造を持つ墓の割合が増えたといえる。

さらに、大川遺跡では墓坑上部に礫と土器の両者が伴う、縄文後期末以来のいわば「伝統的」な墓は13基あるが、そのうち墓坑底部に玉や漆塗り腕輪を伴う例は4例のみである。これもまた、カリンバ遺跡では礫と土器による上部構造を持つ4例すべてに稀少財が副葬されていることと対照的である。

そして新たに、縄文晩期になると墓坑上部と底部の両方に礫を持つ墓 (9例) や、墓坑底部にのみ礫を持つ墓 (5例) があらわれる。これら縄文後期末との相違点は、稀少財を持つ被葬

表1 大川遺跡検出墓坑（晩期）における礫・土器の出土位置

墓坑番号	礫		土器		他の出土遺物		時期	備考
	墓坑上部	墓坑底部	墓坑上部	墓坑底部	墓坑上部	墓坑底部		
GP-126						玉	晩期後半	
GP-217							晩期	
GP-218	○			○		玉	晩期後半	
GP-229						玉	晩期中葉	
GP-248							晩期	
GP-281							晩期後半	
GP-335	○						晩期後半	
GP-339	○	○					晩期	
GP-352	-	○					晩期後半	
GP-354	○	○					晩期	
GP-355	○					玉	晩期前半	合葬墓
GP-363	-	○	○			玉	晩期後半	
GP-367	-					玉	晩期	
GP-377	-					玉	晩期後半	
GP-388	○						晩期後半	
GP-399	○					玉	晩期前半	合葬墓
GP-411	○	○					晩期前半	
GP-421	○	○		○		玉	晩期前半	
GP-424A	○						晩期	
GP-424B	-						晩期	
GP-430						玉	晩期後半	
GP-432	○					玉	晩期前半	
GP-433	○		○				晩期	
GP-434	○						晩期	
GP-440						サメ歯・土製品	晩期中葉	合葬墓
GP-449	○		○			玉	晩期前半	
GP-445	○					サメ歯・土製品	晩期前半	合葬墓
GP-458	○						晩期	
GP-460	○		○		石棒	漆塗り腕輪	晩期前半	
GP-462	○					玉	晩期	
GP-463	○						晩期	
GP-473	○						晩期	
GP-474	○		○				晩期前半	
GP-477	○		○				晩期中葉	
GP-480	○					玉	晩期中葉	合葬墓
GP-485	○						晩期	合葬墓
GP-493	○					玉	晩期	合葬墓
GP-499							晩期	合葬墓
GP-505	○		○				晩期前半	
GP-553							晩期	
GP-583	○						晩期前半	
GP-616	○					玉	晩期	
GP-653	○					玉	晩期末	
GP-658	○	○					晩期	
GP-668	○	○					晩期	
GP-671		○				玉	晩期末	
GP-701		○					晩期	
GP-730	○						晩期	
GP-852	○		○				晩期	
GP-865	-	○				玉	晩期末	
GP-871							晩期	
GP-883	○						晩期	
GP-884						玉	晩期	
GP-887	-					玉	晩期	
GP-888	○	○	○				晩期	
GP-892		○				玉	晩期	
GP-894	-						晩期	
GP-897							晩期	
GP-900	-		○			玉・石剣	晩期前半	合葬墓
GP-904	○		○				晩期前半	
GP-906	○	○				玉	晩期前半	
GP-907	○					玉	晩期	
GP-910			○				晩期	
GP-911							晩期前半	
GP-912		○					晩期	
GP-913	○						晩期前半	
GP-914	○		○			玉	晩期前半	
GP-919		○	○			玉	晩期前半	
GP-920	○	○	○			玉	晩期前半	
GP-935	○		○				晩期	
GP-936	-						晩期	
GP-938	○						晩期	
GP-939	○		○				晩期前半	
GP-949	○					玉	晩期	
GP-951	-		○			玉	晩期前半	合葬墓

○は有、-は上面擾乱により不明、空白は無

者、つまりは特別な存在と考えられた者と、恒久的な墓の上部構造との関連性が厳密ではなくなってきたことを示している。つまり、縄文晩期の時点で墓の上部構造の機能に変化が生じ始めたといえるのかもしれない。

#### 4. 続縄文期の墓における変化と「南川型葬法」

続縄文前半期の墓の上部構造は引き続き礫に土器が伴うものが存在するが、墓坑上部全面にわたる礫の配置から数個程度の礫が置かれるだけになる点や、砂利の散布が見られなくなる点、墓坑上部出土の遺物が少なくなる点など、簡略化の傾向が指摘できる。それと反比例するように、墓坑底部へ副葬する割合と一墓坑内の副葬品数が増加する。また、多副葬墓ではないものの、何らかの副葬品を持つ墓坑の全体に占める割合が増えている。

また、続縄文前半期の恵山文化圏内では、「頭位と推定できる方向に甕、壺形土器の完形品を置き、足部と考えられる方向に大型石を配する『南川型葬法』」（加藤 1982）が存在する。典型例は大川遺跡GP-105で、墓坑底部の腐食遺体は東側頭位の側臥屈葬であり、頭部付近に完形の甕が1点、脚部付近に自然礫が1点置いてある（図4左下）。この墓坑底部における土器と礫を用いた葬法と、後期末から晩期までの墓坑上部における墓標及び儀礼行為との関連性を知るために南川型葬法の成立直前の墓をみてみたい。

続縄文初頭の墓は検出例が少なく多くを論じられないが、これに続くアヨロ2a式土器の時期の墓が、白老町アヨロ遺跡と江別市元江別1遺跡で検出されている（図4）。

アヨロ遺跡墓15は墓坑底部から完形土器3点、墓坑上部から土器と礫が出土している（図4左上）。墓坑上部の土器2点は、複数の礫で囲まれた中央部から、口縁部を上にした入れ子状態で出土した。さらに、墓坑底部に完形土器が立てた状態で置かれており、上部構造の設置とともに、墓坑底部への土器の副葬が行われていることがわかる。先に見た大川遺跡の縄文晩期の報告例75基の中には、墓坑底部から礫が出土する墓は多くあるものの、土器と供伴する例は2例のみであり、相違する。

同じくアヨロ2a式土器の時期である元江別1遺跡墓21では墓坑上部に土器のみが置かれ、墓坑底部長軸の両端に完形土器と自然礫が存在している（図4右上）。この例は墓坑底部において既に南川型葬法をとりながらも、墓坑上部での土器を用いた儀礼も存続しているのである。つまり、これらの墓坑は礫と土器を用いた儀礼を行う箇所が墓坑上部から墓坑底部へと移る過渡期の例といえる。

以後、南川型葬法は南川Ⅲ群土器からⅣ群土器の時期にかけて、主に道南西部地域で一般的な葬法となり、青森県宇鉄Ⅱ遺跡でもみられるようになる。

南川Ⅲ群土器の時期は、加藤邦雄（加藤 1982）が指摘するように、墓坑上部と底部の両方から遺物が出土することが多い。そして、南川Ⅳ群土器の時期には土器と礫が出土するのは墓坑底部からが一般的となる。南川型葬法は、礫と土器の置かれる位置が遺体との関係で決められており、口縁部を上にするという土器の向きも決まっている。このことは定型化された埋葬儀礼の結果が表れているのであり、南川型葬法が縄文後期末から存在する礫と土器を用いた埋

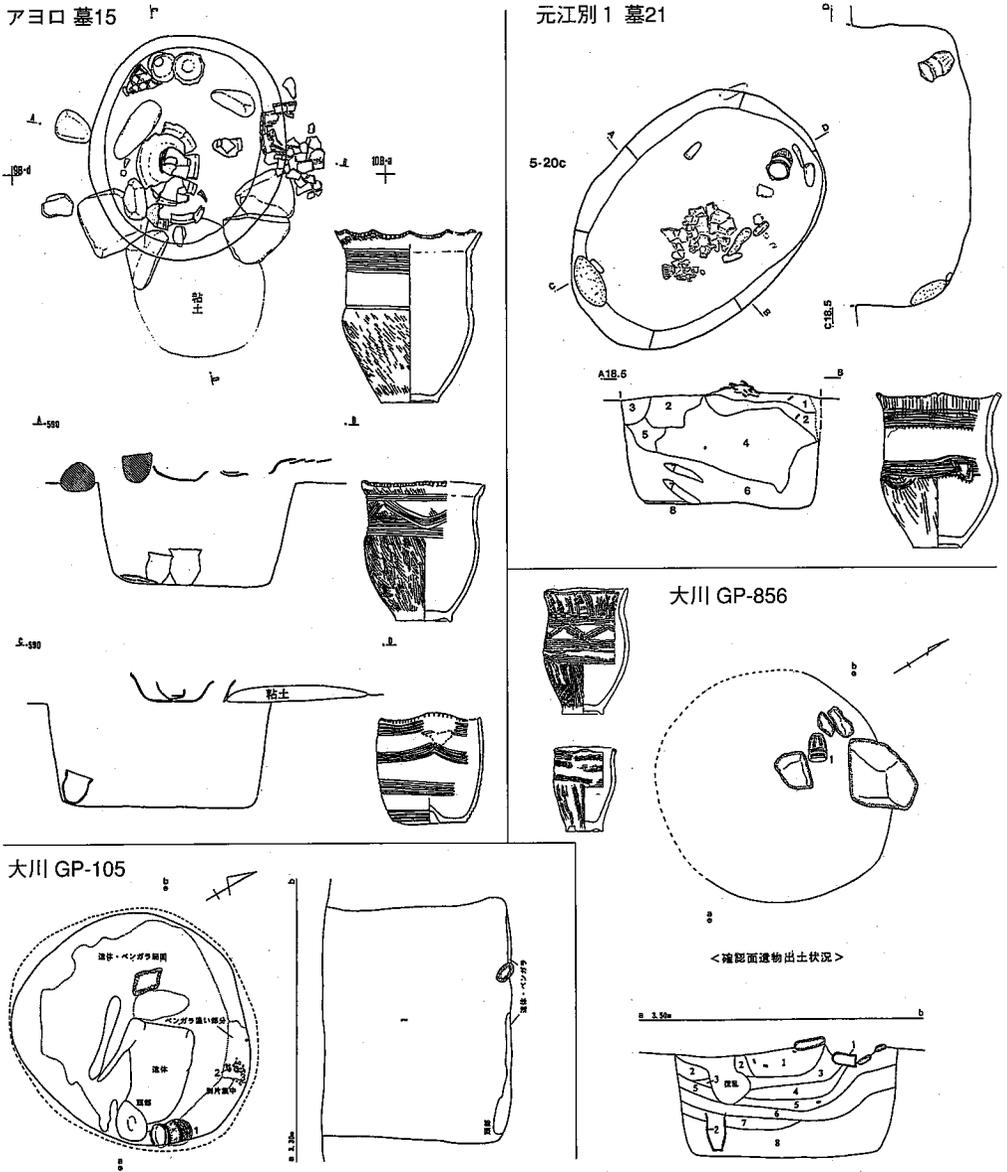


図4 統縄文前半期の墓（アヨロ遺跡墓15〔左上〕、元江別1遺跡墓21〔右上〕、大川遺跡GP-105〔左下〕・GP-856〔右下〕）

葬時の儀礼行為の変化形であることを示している。

なお、南川IV群土器の時期には墓坑底部に遺物が集中する墓が一般的となるが、稀に南川型葬法が定着した後にもかかわらず墓坑上部と底部の両方に礫と土器が存在する例（大川遺跡GP-856など）もある（図4右下）。これについては、林謙作が縄文後期の周堤墓におけるベンガラの散布位置と回数について述べた「手抜き」と「上乘せ」の論理で説明できる（林1983b）。つまり、墓坑底部に副葬することが既に一般的になっている時期において、特別に

その墓を強調する必要がある場合、あるいは墓標的機能を発揮させたい場合には、墓坑上部における儀礼行為と墓標の設置による「上乘せ」が行われたと考えられるのである。

## 5. 墓の上部構造と社会的機能の変化

墓の上部構造の変化を見てきた結果、縄文後期末～晩期初頭に道央部でみられた礫と土器を用いた埋葬儀礼と墓標の設置が、若干の形態変化をしながらも縄文晩期まで存続し、その後、続縄文期には、墓坑底部での儀礼行為の盛行に連動した上部構造の簡略化が確認できた。そして、南川型葬法が縄文後期末からの葬送儀礼の変化形態であることがわかった。では、墓の上部構造が変化した理由について、墓の社会的機能と併せて考えてみたい。

縄文後期末～晩期初頭のカリンバ遺跡では、稀少財を伴う墓や合葬墓という限られた数の墓坑が恒久的な上部構造、つまり墓標を有していた。それが縄文晩期の大川遺跡では稀少財を持たない墓坑であっても墓標を持つ場合が見られるようになる。特に、縄文晩期に礫と土器の両方が墓坑上部で用いられるという、いわば「伝統的」な埋葬儀礼が行われた墓坑であっても、墓坑底部に玉類などの稀少財を伴う例がわずかである点は縄文後期末との大きな違いである。

つまり、縄文後期末の墓標は特別な被葬者の墓を明示し、モニュメント効果を発揮して、被葬者の存在と象徴性を生者に意識させていたと考えられるが、晩期の墓標は、他の多くの集団構成員の墓にも作ることが許されたことから、その意識は矮小化されてきたといえる<sup>(3)</sup>。

さらに、続縄文前半期には、礫と土器による埋葬儀礼が遺体の安置時に墓坑底部で行われるという、儀礼が行われるタイミングと位置に変化が生じる。これにより、多くの場合、南川IV群土器の時期には明確な墓標が見られなくなり、墓の上部構造による社会的機能は認められなくなる。この上部構造が持つ意味合いの形骸化傾向は、これと反比例して充実する墓坑底部での儀礼行為と関連していると思われる。

瀬川は、多副葬墓の被葬者を首長であると仮定し、首長が稀少財を持つことで集団全体の威信を保つ役割を担ったと考えている。そして、大量の玉類を副葬する目的は、「首長の地位を象徴するものとしてその遺骸とともに葬ることにあったとしても、その本質的機能は、こうした絶え間なく増え続ける玉の再調整にあった」（瀬川 1983）と述べている。しかし筆者は、玉類の大量副葬が来世においても特別な役割を継承することを示すなど、当時の他界観に基づく何らかの意図があったであろうことは頷けるが、「数量の調整」についてはおそらく副次的なものだったと考える。

稀少財の流通量を単純に出土量から判断すると、縄文晩期以降が圧倒的に多くなり（瀬川 1983、青野 1999a）、その背景には流通を支えた贈与・交換システムの存在が想定される。瀬川は「玉の交換網はそのまま、社会的紐帯の確認・強化網としての性格も備えていた」（瀬川 1983）と指摘し、晩期末葉の多副葬墓の出現を集団間の紐帯が強化された結果と考えている。そうであるならば、まさに葬儀や婚礼の場が、互いの集団の威信を誇示する目的で、稀少財の贈与・交換がなされる機会であり、それにより富の再分配と社会的紐帯を保つ役目を担ったと考えられる。

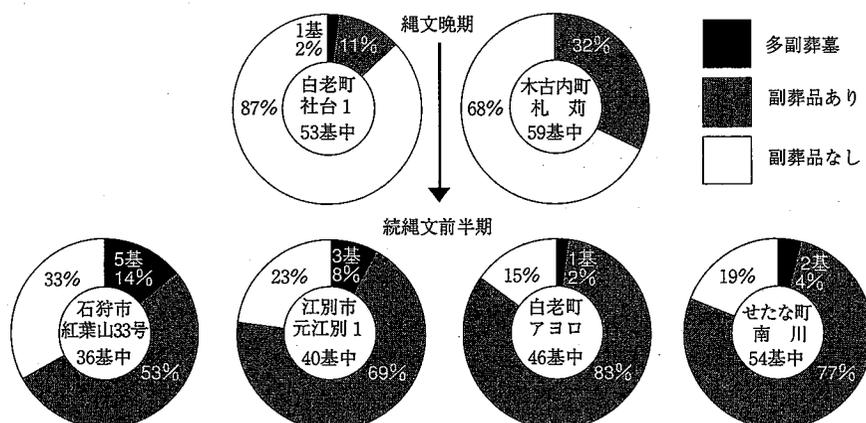


図5 縄文晩期～統縄文前半期の墓地における多副葬墓の出現率（瀬川 2007より転載）

そのような葬儀の機能を想定してよいのであれば、集団内の特別な者の葬儀に際しては、そこに参加した他の集団成員の目の前で大量の副葬品を遺体とともに埋め、稀少財を消失させることで、自集団の威信を誇示する効果を得ていたのではなからうか。つまり、多副葬とする目的は、人々の意識レベルでは、稀少財を惜しげもなく死者とともに埋納するという「自集団の富と力の誇示」であり、いわば「見栄」だったと考えるのである。

一方、多副葬墓以外の墓坑においても副葬品が多くなるのはいかなる理由からであろうか。縄文晩期と統縄文期の副葬品の割合の違いをみてみる（図5）。

白老町社台1遺跡と木古内町札刈遺跡における縄文晩期の副葬品の割合は、多副葬墓（0～2%）と何らかの副葬品を持つ墓（11～32%）はわずかであり、圧倒的に副葬品を伴わない墓（68～87%）が多い。それに対し、統縄文前半期においては多副葬墓（2～14%）自体の数も増えるとともに、何らかの副葬品を持つ墓（53～83%）が増えたことで全体として副葬品を持つ墓は67～85%と大半を占めている（青野 1999b）。

また、統縄文期の南川IV群土器の時期に墓坑底部からの遺物が多く出土ようになることについて、加藤はこの時期に個人所有の観念が成立したためと考えた（加藤 1982）。しかし、墓坑底部から生活道具や稀少財などの遺物が出土する例は縄文時代を通してみられることであり、あえてそれを問題とする必要はないように思われる。

これについて筆者は、死者に来世での必需品を携行させるとの意味や、穢れたものの遺棄など、第一義的な意味の推測もできるだろうが、同時に多副葬墓における「見栄」の思考原理が一般成員の墓においても働き、「まだ使える道具類を惜しげもなく埋納する」点に意義を見出していたためと考えたい。

さらに、多副葬墓及び何らかの副葬品を持つ統縄文期の墓は、副葬品を「惜しげもなく埋める」ことが大きな目的となるため、一連の葬送儀礼の中でも遺体の安置と副葬の場面、つまり墓坑底部における儀礼の重要性が増したと考えられる。そのため、これまで遺体埋葬後に墓の上で行っていた土器と礫を用いた儀礼行為を墓坑底部に集中させることで、その効果を増大さ

せる意図があったものとする。

このように考えると、縄文後期末から統縄文前半期にかけての墓及び埋葬儀礼の社会的機能は、被葬者の存在と象徴性を生者に意識させることにより、集団内の紐帯意識を維持・強化する機能から、他集団との紐帯を、贈与・交換システムを通して確立・維持するための機能に移行したと考えられる。

### おわりに

本稿は、墓自体の機能の時代的変遷を明らかにする前段階として、墓の上部構造が持つ社会的機能を把握することを目的としてきた。しかし、本来議論が必要な「特別な被葬者」とは何かという点についてはあえて触れずに論を進めてきた。実はこの問題は当該期の墓に多くみられる合葬墓の解釈を整理したうえでなければ解決できないことである。合葬墓の埋葬過程と埋葬原理の把握については別稿で記すこととする。

また、道央部における統縄文期の墓制について集成を行った鈴木信は、墓の構造や葬法、副葬品などの時代的変遷を、道央部自発のものとは他地域からの文化影響によるものと分けて捉えており（鈴木 2004）、興味深い。今後はそのような視点も加味しながら分析していきたい。

### 註

- (1) 瀬川がここでいう「集団」とは「集落の成員」を指している。
- (2) 小杉は再生について、他界での再生（遷移的再生）・生まれ代わり（回帰的・循環的再生）・生き返り（蘇生）の3つを想定している（小杉 1995）。
- (3) 墓坑群全体としてのモニュメント効果が発揮された可能性はある。

### 参考文献

青野友哉

1999a 「碧玉製管玉と琥珀製玉類からみた統縄文文化の特質」『北海道考古学』第35輯 69～82

1999b 「大洞～恵山式土器の墓と副葬品—研究成果と今後の課題—」『海峡と北の考古学—文化の接点を探る—資料集Ⅱ』日本考古学協会1999年度釧路大会実行委員会 43～76

乾芳宏

1981 「美沢川流域の環状土籬群」『北海道考古学』第17輯 25～35

乾芳宏編

2000a 『大川遺跡における考古学的調査Ⅱ 余市川改修事業に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書』北海道余市町教育委員会

2000b 『大川遺跡における考古学的調査Ⅲ 余市川改修事業に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書』北海道余市町教育委員会

2001 『大川遺跡における考古学的調査Ⅳ 余市川改修事業に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書』北海道余市町教育委員会

上屋真一編

2003 『カリンバ3遺跡』(1) 北海道恵庭市教育委員会

大谷敏三

1983 「環状土籬」『縄文文化の研究 9 縄文人の精神文化』東京・雄山閣 46～56

加藤邦雄

1982 「道南・道央地方の墳墓」『縄文文化の研究 6 統縄文・南島文化』東京・雄山閣 35～47

加藤邦雄編

- 1983『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会  
木村尚俊  
1984「周堤墓」『北海道の研究』1 大阪・清文堂 251～288  
木村英明編  
1981『北海道恵庭市発掘調査報告書・柏木B遺跡』恵庭市教育委員会  
河野広道・藤本英夫  
1961「御殿山墳墓群について」『考古学雑誌』第46巻第4号 15～34  
小杉 康  
1995「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立—「葬墓祭制」の構造と機能—」『駿台史学』93  
101～149  
小杉康・鶴田典昭  
1989「第3節 日影山遺跡における燃糸文期前葉の石器群の研究」鶴川第二地区遺跡調査会編『真光寺・広袴  
遺跡群Ⅳ』325～404  
鈴木信  
2004「4 道央部における統縄文初頭～後北式期の墓制—土坑墓の分析」『恵庭市柏木川13遺跡』北海道埋蔵  
文化財センター 143～154  
瀬川拓郎  
1980「『環状土籬』の成立と解体」『考古学研究』第27巻第3号 55～73  
1983「縄文後期～統縄文期墓制論ノート」『北海道考古学』第19輯 37～49  
2007「縄文—統縄文移行期の葬制変化」小杉康ほか編『縄文時代の考古学』9 208～218  
西本豊弘編  
2000『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書—平成10年度発掘調査の報告—』礼文町教育委員会  
野村 崇  
1984「北海道の亀ヶ岡文化」『北海道の研究』1 大阪・清文堂 289～318  
林 謙作  
1977a「縄文時代の葬制—第Ⅰ部・研究史—」『考古学雑誌』第62巻第4号 1～19  
1977b「縄文時代の葬制—第Ⅱ部・遺体の配列、とくに頭位方向—」『考古学雑誌』第63巻第3号 1～36  
1980a「東日本縄文期墓制の変遷（予察）」『人類学雑誌』第88巻第3号 269～284  
1983「柏木B第一号環状周堤墓の構成と変遷」『北海道考古学』第19輯 19～36  
春成秀爾  
1983「竪穴墓域論」『北海道考古学』第19輯 1～18  
藤本英夫  
1971「北の墓」東京・学生社  
藤原秀樹  
1999「北海道における後期後葉から晩期初頭にかけての集団墓地について」『日本考古学協会1999年度釧路大  
会研究資料集』Ⅱ 3～36  
2007「北海道後期の周堤墓」小杉康ほか編『縄文時代の考古学』9 19～32  
北海道埋蔵文化財センター  
1982「美沢川流域の遺跡群3」『北海道埋蔵文化財センター調査報告』1  
矢吹俊男  
1984「配石遺構」『北海道考古学』第24輯 65～73  
山田康弘  
2008『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』東京・同成社